沖縄における
大規模災害時の支援を考える
地域円卓会議

大規模災害発生時に、島嶼県沖縄で何が起こるのかを共有し、その時、発生する困りごとに対応する民間ネットワークの在り方と役割分担を考える

実施報告書

日　　時：　2026 年 3 月 22 日（日）13:00-16:00（受付開始 12:30-）
場　　所：　なは市民活動支援センター会議室 1
　　（沖縄県那覇市銘苅 2-3-1 なは市民協働プラザ 2 階）
主　　催：　一般社団法人災害プラットフォームおきなわ
共　　催：　認定 NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク
協　　力：　公益財団法人みらいファンド沖縄、NPO 法人まちなか研究所わくわく

報告書作成
一般社団法人災害プラットフォームおきなわ

【報告】沖縄における大規模災害時の支援を考える地域円卓会議

■日　　時：2026 年 3 月 22 日（日）13:00-16:00
■場　　所：なは市民活動支援センター会議室 1
■着席者数：11 名（論点提供者、司会、記録者含む）
■参加者数：会場 46 名オンライン参加 24 名　計 70 名
（行政、NPO・市民活動団体、企業など）

■主　　催：一般社団法人災害プラットフォームおきなわ
■共　　催：認定 NPO 法人
全国災害ボランティア支援団体ネットワーク
■協　　力：公益財団法人みらいファンド沖縄
NPO 法人まちなか研究所わくわく

論点提供　**宮平未来**　（一般社団法人災害プラットフォームおきなわ　事務局長）

大規模災害発生時に、島嶼県沖縄で何が起こるのかを共有し、その時、発生する困りごとに対応する民間ネットワークのあり方と役割分担を考える

現在、国の防災基本計画の下、災害支援ネットワーク（災害中間支援組織）と呼ばれるネットワーク型の組織が全国各県で立ち上がっています。このネットワークは、行政の公助だけでは限界があるという前提で、被災地情報の集約・物資やボランティア等の受け入れのミスマッチの防止、様々な専門支援の調整を行う、等の機能を期待された民間のネットワークです。すでに 27 都道府県でそのネットワークが立ち上がり、沖縄県ではようやくネットワーク立ち上げの議論を始めるという段階となりました。今回の円卓会議では、島嶼県沖縄県内で大規模災害が起こった際のシミュレーションを確認しながら、このネットワークの重要性や課題を共有します。

センターメンバー

宮平未来
一般社団法人災害プラットフォームおきなわ
事務局長

照屋雅浩
沖縄県知事公室消防防災対策課
副参事

池田佳世
沖縄県福祉生活部生活安全安心課
副参事

前原土武
災害 NGO 結
代表

神元幸津江
認定 NPO 法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク

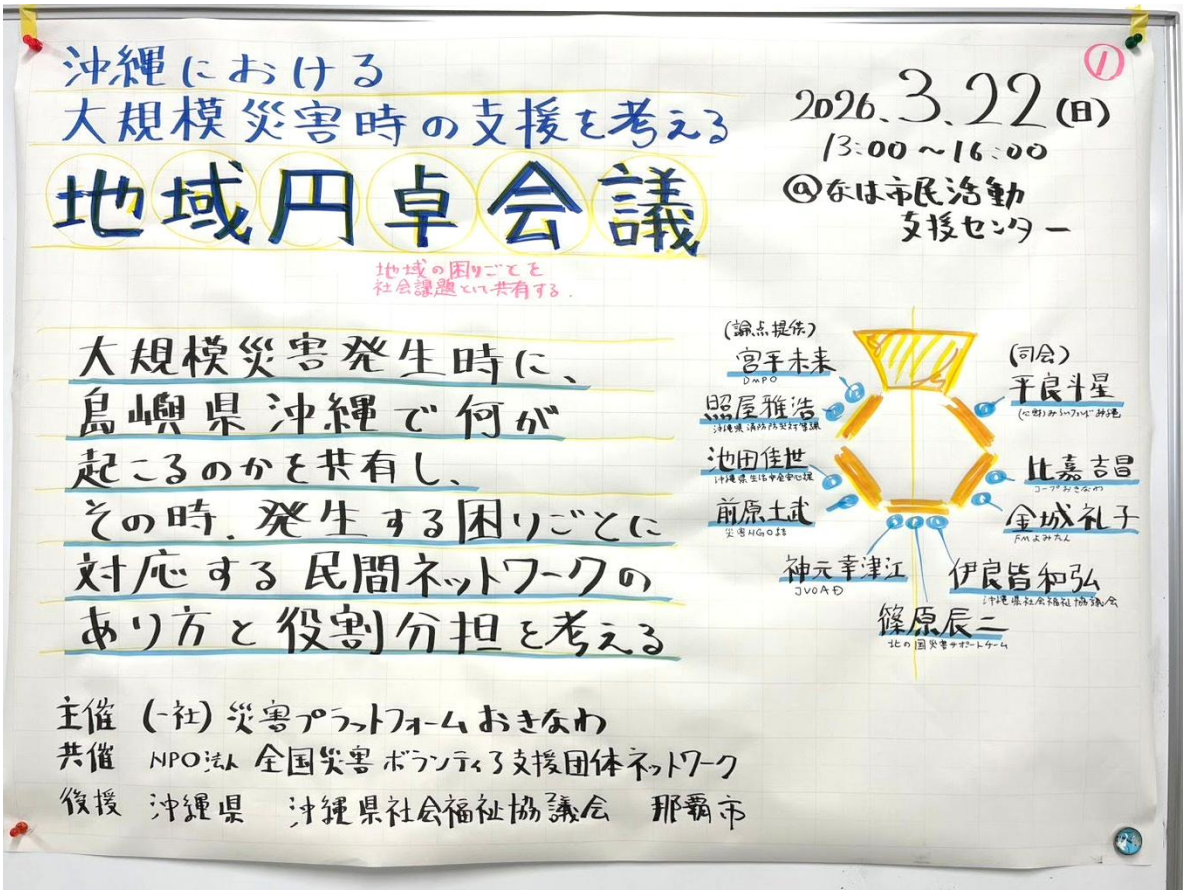
篠原辰二
北の国災害サポートチーム
代表

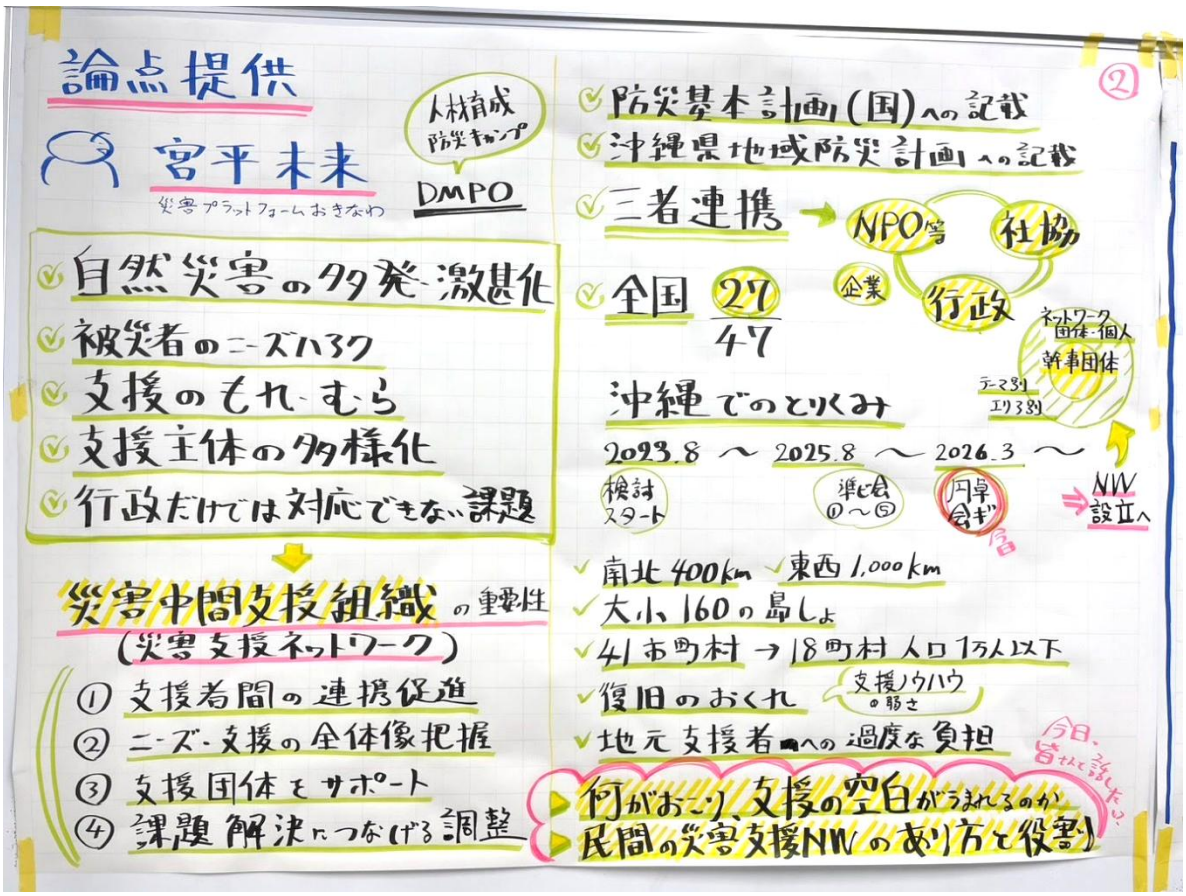
伊良皆和弘
沖縄県社会福祉協議会
地域福祉部長

金城礼子
株式会社 FM よみたん
放送局長・取締役

比嘉吉昌
コープおきなわ
バックアップ本部
本部長スタッフ

＜板書記録＞


①
沖縄における
大規模災害時の支援を考える
地域円卓会議
地域の困りごとを
社会課題として共有する.
2026.3.22(日)
13:00～16:00
@なは市民活動
支援センター
大規模災害発生時に、
島嶼県沖縄で何が
起こるのかを共有し、
その時、発生する困りごとに
対応する民間ネットワークの
あり方と役割分担を考える
(論点提供)
宮平未来
DMPO
照屋雅浩
沖縄県消防防災対策課
池田佳世
沖縄県生活安全安心課
前原土武
災害NGO結
(司会)
平良斗星
比嘉吉昌
コープおきなわ
金城礼子
FMよみたん
神元幸津江
JVOAD
伊良皆和弘
沖縄県社会福祉協議会
篠原辰二
北の国災害サポートチーム
主催 (一社) 災害プラットフォームおきなわ
共催 NPO法人 全国災害ボランティア支援団体ネットワーク
後援 沖縄県 沖縄県社会福祉協議会 那覇市


②
論点提供
宮平未来
災害プラットフォームおきなわ
人材育成
防災キャンプ
DMPO
自然災害の多発・激甚化
被災者のニーズハラク
支援のもれ・むら
支援主体の多様化
行政だけでは対応できない課題
災害中間支援組織の重要性
(災害支援ネットワーク)
① 支援者間の連携促進
② ニーズ・支援の全体像把握
③ 支援団体をサポート
④ 課題解決につなげる調整
防災基本計画(国)への記載
沖縄県地域防災計画への記載
三者連携
NPO等
社協
企業
行政
全国 27/47
ネットワーク
団体・個人
単事団体
テーマ別
エリア別
沖縄でのとりくみ
2023.8 ～ 2025.8 ～ 2026.3 ～
検討スタート
準備会 ①～⑤
円卓会ギ
NW設立へ
南北400km
東西1,000km
大小160の島しょ
41市町村 → 18町村 人口1万人以下
復旧のおくれ
支援ノウハウの弱さ
地元支援者への過度な負担
何がおこり、支援の空白がうまれるのか
民間の災害支援NWのあり方と役割
今日、皆さんと話したい。

人的ネットワーク
人を救う

照屋雅浩 さん

沖縄県 知事公室 消防防災対策課 副参事

大規模地震の被害想定

(H25 想定調査)

(海溝型地震)

▶ 沖縄本島南東沖地震 3連動

建物(全壊) 58,346棟

人 (死者数) 11,340人

(負傷者) 116,415人

とりくみ
- ✓ 沖縄県総合防災訓練
- ✓ 美ら島レスキュー
- ✓ 石油コンビナート等総合防災訓練
- ✓ 広域 地震・津波 避難訓練

《リスクと特徴》

- 広大な海域に島々が点在する
  → 県外からの救援等を受けるまでに時間かかる
- 沿岸部の低地に人口が密集
- 町村のキボが小さく離島を抱えている
  行政区多い
- 観光客や外国人が多数滞在
- 台風の常襲地域

空港 港 基地

③

池田佳世 さん

沖縄県 生活福祉部 生活安全安心課 副参事

災害救助法の担当部署
避難所物資支援班

R7 台風8号 救助法適用

本島 − 離島 へどうやって届けるか

被災者 (罹災証明書の発行
公的支援等の入口

民間の支援 大事.
コーディネートが大事

市町村・行政職員のやることが増

被災者の生活再建に向けて.

協定
市町村が最前線
バックアップ (県として) ネットワーク

これから対話をスタートして役割分担を検討していきたい

前原土武 さん

災害NGO結 代表

災害支援のコーディネート

お寺・ビニールハウスへ物資届けた (のと)

行政は大きなスミ, 民間はこまかなスミ

こぼれおちにくくすることが連携

それぞれ得意なことがある − たとえば 入浴支援 お湯届けたり

社協 災害VC デイサービス

できない専門性高い → 屋根にブルーシート

《フェーズの変化》

発災

避難所 →
仮設住宅 →
復興住宅 →
一般住宅 →

救出 救命 避難 | 食料・水 泥出し片付け たきだし | 引っこし 外出支援

④

支援の足し算 → 引き算へ
自立に向けて.

行政職員も被災者 (フォロー必要 外部がクッション役に)

民間と行政が
相談しあえる関係大事だが
受援力 → 行政にがて.

《沖縄では》

外から入れない. 内での支えあい

近助 → 数週間

✓ 助かった命を. イジすることの困難

✓ 国との連携もでてくる

✓ ガイドラインあったらよいのでは.
↳ それぞれの主体の役割

受援計画を具体に. まず県内
民間でモレをカバーする

神元幸津江さん

JVOAD 事業部リーダー

2016年設立

支援のモレ・ムラがなくなるような
コーディネーション

全国28/47

今年中に5~6県たちあがるみこみ

キノウするものにしていくこと大事

行政 ⇒ 制度 ― 運用のハバ大きい

市町村 ― 県 ― 国

ノウハウのちくせき

制度活用していく

民間でもつないでいく

住民・被災者の困りごと

小さい単位で住民の声・情報共有すること

篠原辰二さん ⑤

北の国災害サポートチーム 代表

本業 地域福祉支援

キボ感近い 空港 面積 (北海道と沖縄)

2019 立ちあげ ― 2018 胆振東部地震

被災者支援のジャンルごとのネットワーク

情報交換の場 52回 ⇒ 行政施策へ

災害おきて ⇒ 設立へ.

支援ネットワークのイジのムズかしさ

人にイゾンする部分も
すがた・かたちがみえにくい. 課題

ガバナンス・財源

民間のよさを確立しながら.

行政 社協 民間NW

地元NPO
農協
道外NPO
外部支援団体

各災害によって
関わる民間
はかわってくる

3つ目のガバナンス大事

伊良皆和弘さん

沖縄県社会福祉協議会 地域福祉部長

2001 台風13号 波多喜村

H25/2013 相互応援協定 (県内社協)

36名の社協職員 → のとへ.

市町村社協 → 独立した組織

となき → ライフライン復旧 (受援)

さいしょ.「こないでくれ」

2004 中えつ地震 ← 生活福祉資金のみ

H19 2007 中えつ沖地震 ← 災害VC支援のようせいおった

この20年たたないしくみ

社協だけでやろうではなく.

間をとりもつ存在.

外部NPO と 地元

DWAT
災害福祉支援チーム

サブセッション ⑥

プレーヤーの存在
ひろく・ハバひろく.
福祉・子ども
とらえてOK

企業の
まきこみ.
業界団体

福祉大事 ― ハード ソフト

コミュニティ こわれる ― 集会所.

困ってる者
生活再建.

福祉事業所

ひなん所

なにもかも足りない

リソースの
たなおろし.

足りない
もの

市町村
さいしょの一手は!

金城礼子さん
FMよみたん

コミュニティ放送
台風災害放送（パーソナリティ 100名 ボランティア）
24時間体制
嘉手納町・北谷町・読谷村をカバー
↳ 協定へ
番組に出ていただきたい（今日皆さん）
県内17局（コミュニティFM）
連携
今、どこで、何がおきているかを伝える
足元の情報を
ネットワークの情報共有
ラジオ インターネット放送／リアルタイムで

比嘉吉昌さん
コープおきなわ

⑦

宅配 45,000世帯　店ポ 9店ポ
食を届ける拠点 7事業所
150台トラック（1〜1.5t車）
災害時の食をどう届けるか
夕食宅配 → おとしより の見守り
社協との協定も
地域へどう貢献できるのか、
様々な団体と連携して、
島しょ県 → 港・空港 から入れないといけない
自給率3割　どう食をイジするか、
県内スーパー／ドラッグストア3タイ（1.5日分）
↳ 災害時拠点となりえる（在庫をおかない オペレーション）

沖縄のリソース
災害時にうごく人もいる
今日この場にきている人だけでなく
14分野、ネットワークのたなおろし
定期的に必要
ネットワークの質
つながりのアップデート
生きものかわっていく
2019 台風19号 長野県
その日の夜に入っている
1ヶ月前 訓練
災対本部 たちあげ
支援本部
NPO・県社協 入っている
ふだんのしくみに NPOなど 入れておく
行政の人事異動
関係性をどうイジしていくかも課題

県 災害救助法
行政とのコミュニケーション
相談してまかせていいんだと思って（行政として）
できることがわかれば、イメージできれば
どう対話していくのかこれからつみあげていく
JVOAD 専門領域
担い手よやす、ひらく（ノウハウ）
平時・災害時
冊子化して公開

ネットワークのガバナンス
信用されるには、
小キボでも支援は必要
農業被害、
民間支援としてできること
信頼高まる 民間中心に
しくみ化すること 協定（書面化）
NWたちあげ
大キボ災害の経験ない中で 島しょ県の課題共有
キボでNW役割ちがう
シミュレーション いろいろ必要
支援 → 行政も いっしょにたよりあう
関係性 どうつくるか
NWの信頼性
アップデート・常時コミュニ

■今後のアプローチの方向性（提案）

提言 1　民間ネットワーク設立（2026 年度）と、ネットワークの持続的な「質の更新」

「災害中間支援組織」を立ち上げる際には以下のことを留意すべきです。このネットワークは、情報の集約、物資や民間支援組織（ボランティア団体や企業等）のマッチング、専門支援の調整という四つの中核機能を担わせるとともに、平時から外部支援団体の信頼性を確認し合える関係性を育てることが求められています。ネットワークは固定された組織ではなく「繋がりの質」そのもの。中心人物の異動や不在によって機能が失われないよう、役割や連携の仕組みを明文化し、組織やある個人に依存しない持続的な運営体制を構築する必要があります。特に人事異動が避けられない行政側とも「顔の見える関係」を絶やさないための継続的な対話の場が不可欠です。多様な主体を巻き込みながら、14 の分野別にリソースの棚卸しと弱みの把握を進め、沖縄独自の支援の形を具体化していくことが今後の大きな柱となります。

提言 2　行政・社協・民間の「受援力」向上と、官民一体の受援体制構築

大規模災害時、行政が責任を背負いすぎる姿勢を脱却し、外部・民間の支援を適切に受け入れ、頼る力「受援力」を高めることが重要です。過去の事例が示すように、平時に繋がりのない相手からの支援は、有事に受け入れられないことがあります。行政の訓練への民間の日常的な参加等、「顔の見える関係」を実績として積み重ねておくことが、スムーズな受援の前提となるでしょう。 行政という「大きな網」と民間という「細かな網」を重ね合わせることで、制度の枠から漏れてしまう被災者（在宅避難者や支援が届きにくい層）への対応が可能になります。具体的には、行政の災害対策本部に民間支援チームの役割をあらかじめ組み込み、発災当日から即座に連携できる座組を平時から設計しておくことが求められます。 外部資源が入りにくい島嶼県・沖縄においては、県内の受援体制の整備が他県以上に重要な意味を持ちます。行政・社協・民間の三者が対等に頼り合える関係性こそが、140 万県民の命を守る基盤です。

提言 3　沖縄の特性を踏まえた「災害の解像度」向上と、県・市町村をつなぐ多層的なアプローチ

大規模災害の経験が乏しい沖縄において、発災時に何が起こるのかという「災害への解像度」を県民全体で高めていく活動を継続すべきです。島嶼県特有の物流寸断・孤立リスク、そして食料供給の脆弱性といった沖縄固有の課題を広く共有し、支援への意識を日常的に更新し続けることが第一段階です。コミュニティ FM や生協といった日常的なネットワークを持つ民間団体を訓練や計画に組み込み、「平時と非常時の関係性」をアップデートしながら、具体的な役割分担を明確にしていくことが不可欠です。 あわせて、この取り組みを県レベルにとどめず、市町村単位へと展開していくことが次の重要な手立てです。住民が災害を「自分事」として捉えられるよう、県と連携しながら各市町村に出向き、地域の実情に即した対話を積み重ねることが求められます。特に人口規模の小さな自治体ほど、発災時の人的リソース不足が深刻であり、平時からの解像度向上が直接的な備えとなります。 その際、県規模でのマクロな調整と、市町村・地域レベルでのミクロな対話は、それぞれ異なるアプローチを必要とします。両者の役割を丁寧に整理しながら重層的なコミュニケーション設計を進めることが、実効性ある備えへとつながります。

■参加者によるサブセッション

大規模災害発生時に、島嶼県沖縄で何が起こるのかを共有し、その時、発生する困りごとに対応する民間ネットワークの在り方お役割分担を考える

（参加者記載の原文をそのまま記載している為、事実と異なることがあります。）

【発表内容】

1. ネットワークとプレイヤーの拡大（発表 1）

支援の担い手が不足している現状に対し、既存の枠組みを超えた連携が提案されました。

- **福祉分野との連携:** 災害専門のメンバーだけでなく、平時から福祉等の多分野に携わる人々をネットワークに巻き込み、ノウハウを蓄積することで、有事の担い手を育成する。
- **民間企業の参画:** 行政・社協・NPO だけでなく、民間企業や業界団体を巻き込む。県外の先行事例を参考に、企業の社会的責任（CSR）としての必要性を周知し、参加を促す。
- **情報の可視化:** まずは自分たちの活動を整理し、行政が民間の動きを把握・信頼できる仕組み作りが必要。
-

2. ハード面とソフト面（コミュニティ）の融合（発表 2）

応急仮設住宅の整備という実務的な視点から、被災後の生活の質について述べられました。

- **コミュニティ維持の重要性:** 災害によって壊れた地域コミュニティをどう再生するかが鍵。
- **集会所の役割:** 単に住宅を作るだけでなく、ユニットごとに集会所を設けるなど、「人が集まれる場所」をハード面で確保する。
- **孤独死・孤立の防止:** 集会所を通じた交流が、特に独居高齢者などの安定した仮設生活を支えるソフト面の基盤となる。

3. 平時からのリソース棚卸しと市町村レベルの課題（発表 3）

生活困窮者支援や自治体の現場視点から、準備不足の現状と今後のプロセスが共有されました。

- **平時＝有事の地続き:** 生活再建が困難な層にとって、震災後の立ち上げは極めて過酷。平時から災害を意識した準備が不可欠。
- **リソースの不足と整理:** 物資の保管場所や避難所の受け入れ体制など、根本的なリソース不足を認識。まずは県内のリソースを「棚卸し」し、不足分を整理して優先順位をつける必要がある。
- **市町村レベルの初動:** 町議会議員や地域 NPO など、現場に近いレベルで「まず何から始めるべきか（最初の一手）」がまだ見えづらく、具体策の策定が急務。

【参加者メモ】

①

・民間の取組みを行政が把握できない

・なにをもって民間の信頼を担保するか

・“防災” に関係なく、地域のプレイヤーと繋がっている団体がある

・広域避難に対応する準備

・既存リソースの活用

・民間の枠を超えた

②

シミュレーションの大切さ

・各市町村と県との連携

・リソースを活かす構造と訓練

③
・行政がやるべきことができず現場対応におわれているのは
・町村は一人で見ている業務が多い
　一人で広く見ている
　市だと１課→町村　１係１人
　担当一人に県や住民から問い合わせ
・公務員も被災者である。日中は公務、夜は家族
・国や県から町村へ人的支援必要。通常業務が止まる。受援
④
・県域が市町村（字）レベルで把握できるのか？
・独居老人の増加（那覇）北部はコミュニティの力がまだ強い
⑤
・個別避難計画
・要配慮者の対応
・平時から行政と民間支援がつながっておく
　近所コミュニティが大事
⑥
・発災の前から基盤整備
・県人会としての関わり、障害当事者
・困窮者支援、北部と町村の支援
・被災をきっかけに困窮も
・生活再建はひじの関わりが重要。災害時も意識しながら準備必要。
・フードバンクが確保したけど場所が
・何もかも足りない状況
・全国比で場所あるだけでもまだまし
・お金が足りないのは見えてくる
・つなぐチーム（フルタイム）県内のリソースの棚卸し。
・まずは不足の把握。県で優先順位
・最寄りの避難場所を知らない。入っていいのかもまだ不明の状態
・那覇市で先に取り組んでいて、それを県へ広げていく形が動き出してきた。市町村が要。
・個別の市町村、NPO の動きは必要だけど、何からしていいのかモヤモヤする状況
⑦
・被害地ボラ
・沖縄では離島。港つかえなかった。
・医療ケア
　▸段ボールベット
　▸在宅ケアの人のケア
　▸ex）認知症のひと
・近助
・市町村からの要望と法律制度つなぎ
・地元の声ひろうのムツカシイ
・ボラと連携して、声
・役場の職員とのすみわけ、整理
・平日のネットワークどうつながる？
　飲み会？
　どうスタンバイする？
　個々のモチベーションはある
　関係性の維持
・沖縄の災害とは
・災害のレベルどのくらいでこのネットワークは動くのか
⑧
・北の国
・危機感薄い
・顔が見える関係大事
・細かい網
・何ができてでいないか見える化
・連携の難しさ
・何を想定するのか
・シミュレーション必要
・３パターン
・民間との協力
・行政の横ぐし
⑨
（ハード面）
・離島は陸続きでない分、どう資材を運ぶのか
・ハード面での対応
（ソフト面）
・DWAT を民間で作れないか
・行政は縦軸。横軸どうやっていくのか

・ネットワークもいろんな種類がある
・どんどんアップグレードされている
・仮設住宅をどんどん作る支援から、コミュニティ重視の支援になった
・音の問題や暑さ、寒さ。プレハブだからの問題はある
・一律の規格で作られるため、車イス、小人病の人には住みにくい状況であった
・カスタマイズに NPO の力が発揮された
・国のお金で作ると早い。
・今までのコミュニティがなくなる。形成していく。
・NPO の方が情報持っていることも
・被災地のサポートを民生委員がやっている

沖縄における大規模災害時の支援を考える地域円卓会議
参加者アンケート集計

◆概要

・日時：2026 年 3 月 22 日（日）13:00 - 16:00

・場所：なは市民活動センター会議室１

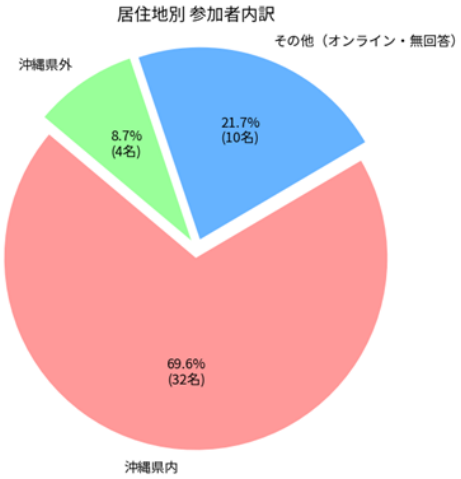
・着席者：11 名（論点提供者、司会、記録者含む）

・参加者：会場 46 名オンライン参加 24 名

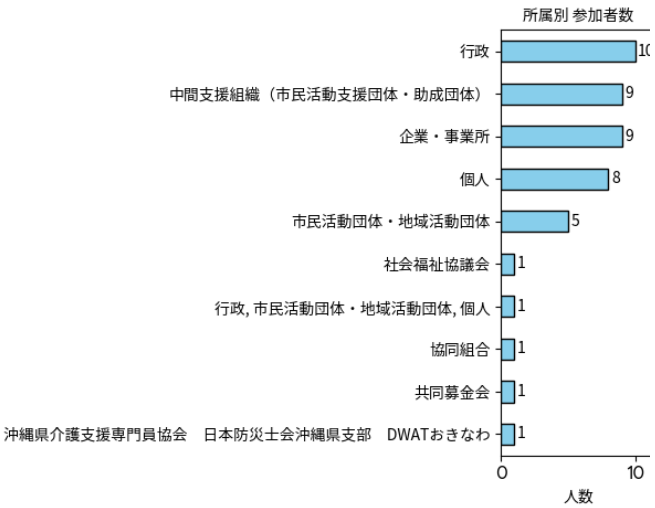
計 70 名

（アンケート回収 46 名、回収率 66%）

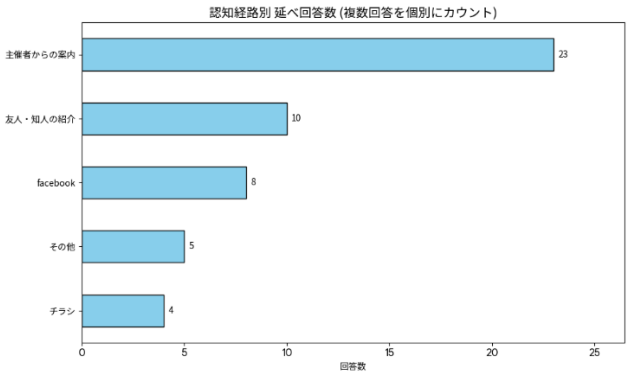
１．どちらから？



２．所属



３．円卓会議はどのように知ったか



４．満足度

平均点：4.56 点　（5 点満点）

5. 満足	4. 概ね 満足	3. 普通	2. あまり 満足し ていな い	1. 不 満足
２９名	１４名	１名	０名	１名

５．満足度の理由

アンケートの「理由」欄に記入された内容を、満足度（スコア）ごとに、原文のままリストアップいたします。

（満足：5 点）の理由（原文）

- 各分野の専門家（県外）からの情報共有が貴重であった。
- 災害や防災の知識が全くなかった為、今回お話を聞いて平時の時から関係性を築いていくことの重要性を知ることができた為。
- 着席社も多岐に渡り、様々な意見が聞けて良かった。また、近くの人と話し合う部分もあり、大変良かった。
- 日頃の活動は専門職団体との研修が多く民間団体の多様性を、確認できた 司会者の進行が素晴らしかった
- 様々な事に気付くきっかけとなった

- 先日、高松でも開催のご協力をいただきました。あの時は自分自身、結構いっぱいいっぱいだったので、今回参加させてもらって「高松でもこんな話あったな」とか「これ、検討しないといけないって思ったんだった！」って記憶も蘇りました。香川県も円卓会議以降「ネットワークをどう維持するのか」は結構議論になっていて、生き物であって見えづらいものだからこそ、フワッとさせつつカチッと構築するのが難しいです。災害支援や防災活動に関わっている市民だけでなく、それ以外の人もしっかり巻き込んで仕組みとネットワークを構築していこうと思います。香川も頑張ります！また色々とご相談させてください。
- 受援、障害当事者団体も、こういった場に共にいられたら良いと思いました。
- 先駆的な実践者の知見や現状の課題が網羅されておりとても参考になりました。貴重な機会をありがとうございました。
- いろんな事例に学びながら、沖縄県の課題を知ることができた。
- それぞれの分野での課題が見えて、ある程度の全体課題が把握できた
- 各分野の方々がいざという時のことを事前に話し合い問題点を共有し、計画を立て取り組みを始めるきっかけとなったのではないでしょうか。
- 今回の円卓会議への参加を通じ、中間支援組織設立の趣旨が明確になりました。それは、個別の活動主体や行政、企業という「点」を繋ぎ、地域課題の解決を加速させる「ハブ」となることです。 各現場に分散している熱意やリソースを集約し、情報の交通整理や伴走支援を行うことで、単独では困難な大きな社会的インパクトを生み出す基盤を構築します。この組織が、対話を通じて合意形成を図り、共創を促す重要な結節点になると確信しました。
- 丁寧にネットワークを作られている印象で幅広い関係者を集めたこのような円卓会議ができているのは素晴らしいなと思いました。ネットワーク形成後はなかなか具体的な動きが作りづらい部分もあるかと思いますが、それぞれの専門的な知見や取り組みをされている団体の皆さまのお話しには既に想定できる課題感なども示されており学びがありました。単純に防災を地区ごとでされているだけだと見えてこない部分もあろうかと思いますので、徐々に地区防災組織や関係者との対話が深まっていくことを期待したいと思います。
- 中間支援組織の役割などの話は為になりました。東村は小さなコミュニティーですがそういった組織は今後絶対に必要だと感じたので、組織設立できるよう動こうと思いました。 オンラインでしたが、参加させていただきありがとうございました。
- 災害中間支援機能整備について、民主導での問題提起であること
- 多用な立場の方から情報提供があり、かつ各立場から今後のネットワーク構築・運営に向けた見解が聞けたこと
- 様々な業種が一同に集うことが殆ど無いため、今後も継続してもらいたい。
- 贅沢なくらいの登壇者が勢ぞろいしたこと。(多すぎた気もしますが) 語られる内容がそれぞれ、充実していたこと
- 普段交流の無い方との意見交換は貴重でした。
- zoom での参加でしたが聞き取りやすくわかりやすい内容でした。本当は現地で参加したかったです。また開催してください。

- ネットワーク立ち上げとしてはとても良い内容だったと感じる。しかし、地域円卓会議自体に毎回、登壇者が複数いて、それぞれにとても重要なキーパーソンであることもわかりつつも、情報量が多いので、毎回要復習です笑
- それぞれの立場がとても分かりやすく現場の声も聞けてよかった
- 様々な主体から生の情報が得られていろいろな気づきにつながった
- たくさんの視点をいただいた。
- 様々な分野の参加者が課題を自分事化されていたため
- 宮平さんの論点提供により被災経験が比較的少ない沖縄の災害対策の現在地を知れた

（４．概ね満足）

- どのような方たちが何をしているか理解した。
- 資料をじっくり見たい箇所がありました。
- 多様な関係者との異なる活動を踏まえながらも連携の可能性を穏やかに協議し、最後のまとめで次の円卓会議で話し合う課題感ものこしつつのリードが大変勉強になりました。
- 島嶼県である沖縄県で大規模災害が発生した際に何が起こるのかについて、自分事として考える機会が持てました。
- 実際に活動している方の話が聞けた
- 円卓会議全体を通じ､｢まず沖縄で何が起こるのかという共通認識を持つこと｣が第一歩であり、その上で平時から対話と仕組みづくりを重ねていく重要性が共有されたこと。
- 意義については割愛｡発表者が多すぎる。フロアーの参加者は質問したいことがたくさんあったはず。会議の厚みをますためにも、フロアーからの意見や質問を受けるための時間をもっと確保すべきであった。サブセッションでの話し合いにしても、すべての発表者が終わり、それを受けて議論すべきもの。途中ではしょるとは､ぼくの感覚では理解できない。 それでも、たくさん学ばせていただきました。
- 登壇者同士のクロストークも聞きたかった。時間があれば参加者同士のコミュニケーションがもっと取れたら良かったかもです。
- 防災に関する県内多方面(機関等)の取り組み、現状と課題を知ることができた
- いろいろな立場からのご意見を聞くことができてよかった。県当局の職員も多く参加してくれた点もよかった
- グループでの話し合いが聞こえづらかったのが残念（やむを得なかったが）
- 具体的な災害を知りたかったがイメージができなかった （二次災害も含め）沖縄の特性に応じたネットワークの姿に期待したい。 FMいいなと思いました。
- 様々な団体の知見の共有や災害時におけるネットワークの団体が見えたため

（３．普通）

- 今現在マップ作りに入ったところ。那覇のまちなかの大変さを体験したこと。

６．円卓会議で印象に残ったこと

- トムさんの現場での対応力と、数多くのプレーヤーの必要性が分かった。
- 受援力、自給率３割、ネットワークは生き物、疑問課題、ネットワークの中に誰が入るのか、どうコミュニケーションをするのか、被災時での電話？ツールは何？
- ネットワークは生き物
- ″島国の大変さを感じました。
- 板書がまとまっていて感心しました。
- 長時間お疲れ様です。″

- 受援力
- 行政の職員が被害者の直接対応することで本来の行政業務が滞ってしまう
- 災害のフェーズにあったガイドラインの作成
- ″なんでも一人で（単組織で）頑張ろうとしない
- 災害が起こったら「動きたい」と思う人はめちゃくちゃいる。という事実。″
- 平時からのネットワークづくりと、役割分担の仕組み化、是非実現できると良いです！
- 受援力　自立を促す支援のフェーズ
- 土武さんの長野県の事例は非常によいですね。ぜひ沖縄県でも信頼の証を可視化していただき、名札やワッペンなどを民間支援会社や個人の受援者に授与していただけると、平時から志高く、有事に取り組みやすいと思います。
- 最後に提起されていた平時からの関係性、コミュニケーションをどう維持していくのかについてはとても大きな課題だと感じました。組織にとって人事異動は避けて通れないので、それぞれの役割を確認しながら仕組みを整えていくことの重要性を認識しました。
- 改めて、陸続きではない沖縄県の課題を認識した。長野県での訓練が実際に活かされた事例はとても勉強になりました。
- 土武さんの実体験の話
- 個別最適化した各分野の地域リソースを、これまでの人的資源依存型ではなく、土台としての連携基盤をいかに構築し、その上に定期的にアップデートされるネットワークを構築するか。
- その実現に向けて、どのような連携が必要かが少しわかった。
- 急速な高齢化など人口減少による労働力の供給不足も懸念されるなか、変化する災害対応フェーズに合った情報連携の枠組みも必要、と感じた。
- いい、円卓会議でした。″
- 行政を「大きな網」、民間を「細かい網」と捉え、両者を重ねることで支援の漏れを防ぐという比喩は非常に分かりやすく、連携の本質を的確に表していると感じた。「受援力」を平時から育てる重要性。沖縄は大規模災害の経験が少ないからこそ、具体的な被害像を共有し、解像度を上げること自体がネットワークづくりの出発点であること。
- ″各分野の方々のそれぞれの視点での意見、提案が聴けたことが良かった。これから一歩一歩積み上げて行けたらと思います。
- 運営のみなさんお疲れ様でした。″
- ″前原トムさんの現場での泥臭くも情熱的な活動は、地域課題に正面から向き合う姿勢そのもので、胸に迫るものがありました。
- 中間支援組織（NPO センターや地域協議会など）は、行政と民間、あるいは住民同士の「結び目」となる重要な役割を担っていますが、おっしゃる通り、その道のりは決して平坦ではないと感じた。″
- FM 局や生協といった専門的な知見を持つ方々が平時から発災時に向けて何ができるかを考えておられるということが素晴らしいと思いました。
- 被災救援・支援活動に取り組む機関や組織が多くあることを知りました。問題はいざというとき、それらが単発的、ばらばらに活動するのではなく、必要な場所に必要な支援を配備、支持する統轄的コントロール機関及び人材が必要なのではないでしょうか。
- 今の沖縄に関わる防災関係の現在地が把握できて良かったです。ありがとうござ

いました。

- 協議会は生き物、日頃のコミュニケーションとブラッシュアップが大事
- 「関係の質」というキーワードが印象に残りました
- 進行のコントロールはじめ、限られた時間内で現在の状況、課題を知ることが出来た。
- 行政は大きな網、民間は小さな網、網を重ねることが連携であるというトムさんの言葉。変わるネットワークをどう維持していくか。→ほんとにこれ、どんな組織でも課題だと感じています。通常のNPOならもう世の中に必要ない、役目が終わったと解散できるけど、災害はずっと続くので。
- 円卓会議自体、とても良い議論の場だと思いました。他の方から、企業ともこういった場を設けてはどうか？というのは良い案だと思いました。
- ラストに未来さんが仰った「解像度がズレている」と言う言葉に頷きました。私は移住者ですが全体的に「行政が何とかするべき事」と考えている方が多い印象です。正しい情報に触れる機会が多くあればいいと感じました。ありがとうございました。
- 前原土武さんの、行政は大きなアミ、民間は細かなアミ、というところと近助という考え方や受援力を行政も民間も鍛えるのが大事、というところや、篠原さんの支援ネットワークの維持の難しさのところが印象に残りました。ありがとうございました。
- 受入れる行政の器
- ネットワークの信頼性担保のためには、平時からのコミュニケーション訓練などが必要
- 大変さを感じた。えらいところに住んでいるなと思った。
- ″生活圏域の被災支援を前提としたとき、広域すぎてもピンポイント過ぎても足らない。県社協が市町村社協を束ねることの非現実性。すべての市町村社協がネットワークの座組に入ることの必然性を感じました。個人的には大学も学生寮を抱え、１０００人の生活拠点と考えるとどこかでつながりを持とうとする主体性が自分にかけていたと思った。
- ある程度の規模の避難所を起点にした被災１ｗのタイムラインシミュレーションをブロック別に検討していくといいのかな・・・。″
- 今ここに来ている人だけではない来ていない人々をどのように巻き込むのか
- 長野県の事例
- 平時のネットワークづくりや連携の重要性を認識した。またそのネットワークは生ものでアップデートが必要である。″
- ″北の国会議の篠原さんがおっしゃった「ネットワークを維持する難しさ」が組織形態が持つ特徴だと再認識
- 前原さんがおっしゃった行政は大きい粗い目の網、NPO 等は細かい目の網というメタファーが腑に落ちた。(目詰まり、すべてを補足できない点も)″

（写真）会場の様子

＜サブセッション　記録用紙＞※編集：参加者名は削除

○ テラ政がやるべきことが明確、現場対応に追われている町村

○ 町村は1人で見ている業務がタクさん
1人で広くみている。
市だと1課→町村 1係、1人
担当者1人に 県や市住民から といわれる。

○ 公務員も被災者 である。 日中は公務、夜は家族

○ 国や県から町村へ人的支援必要。通常業務が止まる。
全滅

＊キーワード
○ 個別ひなん計画
○ 要配慮者の対応。
○ 平時から行政と民間支援団体がつながっておく。
○ 近所コミュニティが大事

・シミュレーションの大切さ
・各市町村と県との連携
・リソースを活かす構造と訓練

○ 民間の取組を、行政が把握できない。
○ 何とか、民間の信頼を担保するか。
○ "防災"に関係なく、地域のプレイヤーとつながっている団体がある。
○ 広域避難に対応する準備
○ 既存リソースの活用。
○ "民間"の様を超えた

・被災地ボラ（熊本など）
・沖縄など離島
　▷港がこなかったら
・医療ケア
　▷陸ボンベッド
　▷在宅ケアの人のケア
　▷ALS、認知症の人、1人暮
・近郊

・ファシリテーション協力
・災害支援

・平日のネットワーク、どうつながる？
　▷飲み会？
　▷どうスタンバイする？
　▷個々のモチベーションはある
　　関係性の維持

・市町村からの要望と法律制度のなぎ
・地元の声とボランのムツカシイ
　▷ボランと連携した声
　▷役場の職員とすみわけ、整理

沖縄の災害とは
　▷災害のレベル
　　→どれくらいのキボで
　　このネットワークは動くのか

北の国
危機感うすい

自然体験NPO
中越ボランティア
福島に拠点アリ
顔が見える関係大事
動かす側

国政とCLC

連携の大切さ
何かできてるかが
見える化
何を想定するのか
シュミレーション必要
三パターン

・那珂市
・民間と協力
・行政の横ぐし

感想

ハード面　大阪に単身ふにん中、離島に陸つづきでないが、どう資材を運ぶのか。
　ハード面での対応

ソフト面
　DWATを月間でつくれないかと考えている。
　行政縦ヨコ、ヨコどくどうやっていくのか
ネットワークいろいろな形態がある

☆どんどんアップグレードされている
どんどんつくる ⇒コミュニティ重視。
音の問題が暑で、寒さ。
プレハブだからこその問題はある
一律の規格で作られているため、
車イス、小人症の人には住みにくい状態であった。
カスタマイズにNPOの力が発揮された。
国のお金使って作ると早…。
今までのコミュニティがなくなる
形成していく。
NPOの方が情報持っていることも
被災地のサポートを自主参加だった

・県域が市町村(字)レベルで
~~[illegible]~~ 把握できるのか? ①
・独居老人の増加。(那覇)北部は
コミュニティの力がまだ強い。②

キーワード
・発災の前からキバンを整備 [illegible]
・県人会とのつながり、強がい当事者
・困窮者支援 生活困窮者支援
パーソナルサポート。 ↳生活リハビリも。
↳被災をきっかけに困窮者も。

生活保護再建は平時のつながりが重要。
災害時も変化しながら準備必要
フードバンクが復活したけど、場所が。
↳付加価値をつける仕組
金銭的で場所なくなるだけでも [illegible]
お金足りないのはみえてる

ファンドチーム(フィランソロピー) 県内のリソースたなおし
↳まずは不足の把握。県で健康化